は諸本の考察が準備不足であるので、なんとも言えない。後日を期したい。

（三）『平家物語評判』巻五「富士川合戦」の「評」

（四）『太平記評判理尽秘伝抄』などがいう理想的人物としての楠正成は『平家物語』に皆無だということである。

（五）私意に濁点を加えている。以下同じ。

（六）『全譯吾妻鏡』（新人物往来社）による。

（七）以上、佐藤謙三校注『平家物語』流布本（角川文庫）の章段による。以下『平家物語』流布本の引用はすべて角川文庫による。

（八）虫喰いのためはっきりしないが、たぶん「し」であろうと思われる。

（九）維盛生存説についてはかつて「近世随筆に見る『平家物語』の受容その一」（華頂女子中・高等学校「研究紀要」第二十号）で論じたことがある。

（一〇）『平家物語評判』では忠度が都へ引き返して俊成に日頃の歌をさし出したことも非難されている。「武門に生まれては。歌道にのみ限らず。一切の芸道有べからず。」（「忠度都落」巻十四）

（十一）筆者が使用する『義経興廃記』は、宮城県立図書館・伊達文庫の版本である。

（十二）『太平記評判理尽秘伝抄』の「伝」の部に関しては、先の加美氏が注目しており、また今尾哲也氏が、「想像力の働きを認めるべきではなかろうか」（「『太平記』と『忠臣蔵』――世界の形成についての覚え書（上）」（「文学」一九八七・四月）と述べられ、最近では今井正之助氏が「伝」の部の本格的考察に着手された感がある。私は『平家物語評判秘伝抄』も「伝」の部は『理尽鈔』の「伝」の部と類似の性格を有するものであり、『理尽鈔』と同様に注目に価するものと思っている。

（十三）『国文註釈全書』所収

（十四）京都大学図書館蔵、五巻五冊（正徳二年刊）

（十五）『翁草』『異説まちまち』など。

付記

この論文は、さる平成七年七月二十三日における関西軍記物語研究会での発表が骨子となっている。席上、加美宏氏をはじめ多数の方々から貴重なご意見を賜った。この紙面を借りてお礼を申し上げます。

（ほりたけ・ただあき　華頂女子高校教諭）

『とはずがたり』構想論

―夢の記録をめぐって―

藤井佐美

序

『とはずがたり』の作者の夢に対する依存度の高さは、頻出する「夢」という言葉に限らず、具体的な夢の内容からも窺える。道綱母が夢よりも自己の体験を重視し、孝標女が教示と知りながらも従い切ることのできない様を記したのとは異なり、本作品の夢は一貫して作者がそれにしたがうものとして、予兆からその結果に及ぶ、一定のモチーフをもって叙されている。

明恵の『夢記』等に見るように、日記と分類可能な作品に現れる夢の記録には、永井義憲氏の指摘する夢ノートの存在を推測せざるを得ない。[一] それは、本作品の夢についても同様であるが、ここでその有無を論じるよりも、作者としての二条が、構想段階で夢に託した意味を考察することにより、記録行為本来の意義が現れてくると考える。

本稿では、現実に見たとする具体的な夢の内容に加え、幻想或いは様々な怪奇現象を、夢同様の機能を果たすものとして考えた上で、夢がいかなる意味をもつか考察する。[二] 又同時に、夢を意識的に配置していこうとする、作者二条の執筆技法に関する私見を述べていくことにする。

猶、本文は作品が孤本である為に伝本校合が不可能で、幾つかの通じにくい箇所もあるが、底本を補う新潮日本古典集成本を使用した。又、頁数もこれに従ったが、引用符等に関しては適宜処理した箇所もある。

一

『とはずがたり』の夢の記事に関する先学の論を検すると、既にその箇所の指摘の時点で多少の相違が見られる。そこで、内容及びその後の展開を確認しながら、再度その記事を追って見るこ

とにする。

①春の初めには、いつしか参りつる神の社も、今年は叶はぬ事なれば、門の外まで参りて祈誓申しつる心ざしより、うば玉の面影は別に記し侍れば、これには漏らしぬ。（巻一・六二頁）

最初の夢の記事は、敢えて内容を伏せた形式をとるものであった。本来ならば源氏の氏神である石清水八幡宮に参拝する習慣であるが、後嵯峨院の諒闇と父の喪中である為にそれも叶わず、悲しみに暮れる中、過去の門前における祈誓とそこで見た夢の回想記事である。ここでいう別記が作品中の記事を指すのか、或いは夢のみを記す全く別の夢ノートを指すのかは、推測の域を越えるものではないが、その後の不安な展開を暗示するに止まる描写である。しかし、その直後の後深草院の皇子出産場面から、夢の内容と不安な立場が具現化されていくことになる。

②人に倚りかかりてちとまどろみたるに、昔ながらに変らぬ姿にて、心苦しげにて後の方へ立ち寄るやうにすと思ふ程に、皇子誕生と申すべきにや。（巻一・六三頁）

後深草院と亀山天皇の間に不和が生じ、更に父の喪中の折の御産は、正室東二条院の時と違い、不安を伴うものであった。二条のことを気掛かりだと言い残した父の言葉により、道明僧正をはじめ親族の見舞いを受けるが、その度に父の存命を願わずにはいられない。そして陣痛時の朦朧状態に、死んだはずの父が心配そうに見守る姿で現れた直後、皇子が誕生する。二条の喜びは「めでたけれども、それにつけてもわが過ちの行く末いかがならん」（六四頁）としか表現出来ない不安を伴う形となり、その後も母親としての姿を描く点では、特有のわだかまりが生じている。そして、「夢沙汰」（六四頁）「夢の疵」（同頁）という夢の話を仄めかしながらも、その内容は相変わらず不明なまま、神の利益も甲斐のないものとしている。しかし、いずれ訪れる皇子の死により、この時点での二条の不安の内容は明らかである。即ち、二条に出家を促す内容の遺言を残した父が「心苦しげ」に現れた理由は、生前待ち望んでいた皇子の死、更には二条自身の暗い行く末の暗示にあり、同時にそれは過去への哀惜を示す象徴としての産物となる。

その後、懐妊の夢告は他者を伴って語られる形式をとり、

③いつもよりむつまじき御言の葉多くて、「うば玉の夢にぞ見つる小夜衣あらぬ袂を重ねけりとは、さだかに見つる夢もがな」とあるもいとあさましく、（巻一・六四頁）

と、後深草院の夢に二条と他の男性が現れたことを、院が打診する。この場合、院が実際に見た夢かどうかというよりも、既に雪の曙との関係に気づいていた院の夢という形をとることにより、二条自身の不安の凝結が次の夢を生むことになる。

④さても今宵、塗骨に松を蒔きたる扇に銀の油壷を入れて、この人の賜ぶを、人に隠して懐に入れぬと夢に見て、うちおどろきたれば、暁の鐘聞ゆ。（巻一・六五頁）

明らかに懐妊を象徴するこの夢を、当事者である二人が同時に見ていることは、夢の伝達機能を信じたことによる恐怖心が、更に夢の形と現れ、二人を驚かせたことになる。[三] それが後に、「やうやう見し夢の名残にやと思ひ合わ」（六六頁）せる現実となり、密事を通す為の、雪の曙の強引なまでの策略を生む展開へとつながる。

院と雪の曙との間に悩む二条は、伏見殿における席次争いが原因で身を隠すが、雪の曙が春日神社に参籠した十一日目の夜、

⑤二の御殿の御前に昔に変らぬ姿にて侍ると見て、急ぎ下向しけるに、藤森といふ程にてとかや、善勝寺が中間、細き文の箱を持ちて会ひたる。などやらん、ふと思ひ寄る心地して、人に言はするまでもなくて、「勝倶胝院より帰るな。二条殿の御出家は、いつ。一定とか聞く」と言はれたりければ、よく知りたる人とや思ひけん、「夜べ、九条より大納言殿入らせ給ひて候ひしが、今朝また御使に参りて帰り候ふが、御出家の事は、いつとまでは え承り候はず。いかさまにも、御出家は一定げに候ふ」と申しけるに、（巻二・一三六頁）

と、それまで院が手を尽くして捜していたにも拘わらず、この夢を機に居所を捜し当てられる。『住吉物語』の霊験譚のモチーフを踏襲している上[四]、夢に対し何ら疑問すら持たない態度が他者を媒介に示されている。或いは、結果的に戻ることになった弁明が生んだ創作とも考えられるが、いずれにせよ夢が現実を映し出すことに絶対的信頼を置こうとしている。そして、このように生じてきた院との距離は、巻を越えて更なる実質的不和へとつながる。巻三は、「山のあなたの住まひ」（一五七頁）に思いを馳せながら、「なほ捨てがたき」（同頁）という迷いから始まるが、

⑥われながら身を恨み寝の夢にさへ、遠ざかり奉るべき事の見えつるも、いかに違へんと思ふも甲斐なくて、〈中略〉いつよりも心細さも悲しさもかこつ方なき。（巻三・一五七頁）

と、院の疎遠を意味する悪夢の兆しを確認している。夢違えを願いながらも、甲斐なく二年後に御所を退出することへの弁明である。只、⑥は、他の夢に比べ朧げな形でありながらも、巻三全体を巻四以降の出家後の世界へ導く伏線の役割を果たしている。不安自体に価値を持たせたことにより、巻三の意義を作者自身が確認したのである。

そして、二条が有明の月との子を懐妊したという夢告を院が見たことにより、院との隔絶は決定的なものとなる。

⑦さても今宵不思議なる夢をこそ見つれ。今の五鈷を賜びつるを、われにちと引き隠して懐に入れつるを、袖をひかへて、「これほど心知りてあるに、などかくは」と言はれて、わびしげに思ひて涙のこぼれつるを払ひて、取り出でたりつるを見れば、銀にてありける。故法皇の御物なれば「わがにせん」と言ひて、立ちながら取ると思ひて、夢さめぬ。今宵必ずしるしある事あるらんとおぼゆるぞ。もしさもあらば、疑ふ所なき岩根の松をこそ（巻三・一六五頁）

光源氏の女三の宮と柏木への態度が忍ばれるような内容には、後深草院の、二人の関係に対する主導権の主張が読み取られる。[五]

しかし、現実の二条にとっては、④と同様に密事を恐れる不安の凝結が形に現れたことに外ならない。この場合、③の夢で院が打診程度に文を送るに終わったのとは異なり、確実に院自身から二条に対して境界線が引かれており、同時にそれは、構成上、作者二条が院との確実な決別意志を示さざるを得ない、最初の場面となった。そして、以後有明の月に関する夢を連続して生むことになる。

同年十一月、⑦の証しとしての出産を記した直後、その八日目の夜、今度は有明の月が、

⑧わが身が鴛鴦といふ鳥となりて、御身の中へ入ると思ひつるが、かく汗のおびただしく垂るは、あながちなる思ひに、わが魂や袖の中留まりけん（巻三・一九〇頁）

という第二子懐妊の夢を見ることになる。④⑦同様の類型のモチーフであるが、互いに「これを限り」（一九一頁）とは思っていなかっただけに、この十一日後の有明の月の死去は、「夢に夢見るより」[六]（一九二頁）も途方に暮れる悲しみであった。東山で、有明の月の四十九日の法要を終えた直後の夢に、

⑨ありしに変らぬ面影にて、「憂き世の夢は長き闇路ぞ」とて抱きつき給ふと見て、おびたたしく大事に病み出しつつ、心地もなき程なれば、（巻三・一九七頁）

と、死後も猶さ迷う有明の月の姿が現れる。この為発病し、急ぎ帰途に着くが、そこで更に、

⑩夢の面影、うつつに車の中にぞ入たせ給ひたる心地して、絶え入りにけり。〈中略〉三月の空も半ば過ぐる程になれば、ただにもあらぬさまなり。（巻三・一九七頁）

という幻覚を見たことで、⑧の有明の月の夢が現実のものとなる。既に院への決別を示した二条は、有明の月に関する夢を記すことで、「人知れぬ契りもなつかしき心地」（一九七頁）さえ自覚するに至り、宮中生活を退き巻三は終わる。

二

以後尼僧の遍歴が始まるが、巻三までの異質な内容が、読者への読みの断絶及び執筆姿勢の変化に関する問題を生じさせるかのように見える。しかし、巻四の比較的早い段階で、冒頭で記した夢の回想を、

⑪契りありてこそさるべき家にと生れけめに、いかなる報いならんと思ふほどに、まことや、父の生所を祈誓申したりし折、「今生の果報に替ゆる」と承りしかば、（巻四・二三四頁）

と再度語り、①で伏せた祈誓の内容を、ここに至り明らかにしている。即ち、二条の今生の幸福の剥奪が、父の往生の保証の代償であるという、託宣の夢想を確認している。いずれも源氏の氏神という条件のもとでの必然的回想ではあるが、出家後の報恩を意識する態度の確認であるといえよう。

さて、二条の遍歴の記の特徴として、説話の記録が指摘できる。説話の独自性や記録に託す二条の願いについては諸説あるが、[七]次の夢は「さても不思議なりし事には」に始まり、説話の記録を契機としている。

⑫「この御神は景行天皇即位十年生れましましけるに、東の夷を降伏のために、勅を承りて下り給ひけるに、伊勢大神宮にまかり申しに参り給ひけるに、『前の生れ素盞嗚尊たりし時、出雲国にて、八岐大蛇の尾の中より取り出でて、われに与えし剣なり。錦の袋あり。これを、敵のためにせめられて命限りと思はん折、開けてみるべし』とて賜ひしを、駿河国御狩野にして野火の難にあふ時に、佩き給ふ剣おのれと抜けて、御あたりの草を切り捨つ。その折、錦の袋なる火打にて火を打ち出で給ひしかば、炎敵の方へ覆ひ、眼を暗がして、ここにて滅びぬ。その故、この野を焼津野とも言ひき。御剣をば草薙剣と申すなり」といふ御記文の焼け残り給ひたるを、ちと聞き参らせしこそ、見しうば玉の夢の言葉思ひ合せられて、不思議にも尊くもおぼえはべりしか。（巻四・二六三頁）

言葉の内容は不明であるが、「見しうば玉の夢」が①の夢同様託宣を示す表現であることは理解できる。しかし、父のゆかりの地である上、後深草院との邂逅直後にもかかわらず、「不思議なりしこと」に始まる説話の内容を、「不思議にも尊く」とだけ記し、詞書ももたない点には些か疑問が残る。即ち、説話の記録に従事する二条の態度は、必ずしも中世的行為とだけ説明されるものではなく、[八]或いはこれまでの夢の記録に代わるものでもあるといえるのではないか。だとすれば、ここでも院を媒介とする熱田との個人的関係を説話に託したことになる。この点については機会を改めるが、いずれにしても、過去の不安が具体性をもち夢となるのに対し、執筆当初も猶抱いていた不安や奇異の念は、同じように夢としての表現方法をとりながらも、内容を不明なままに止め置かざるを得ない程のものであったと考える。

そして、巻五に入ると一層この傾向が顕著に現れ、異質の夢を記していることが理解されるであろう。

⑬あまりに悲しくて、七月一日より八幡に籠りて、武内の御千度をして、このたび別の御事なからん事を申すに、五日の夢に、日蝕と言ひて、「あらはへ出でじ」と言ふ。（巻五・三〇〇頁）

とし、截取の跡が見られるこの夢の内容は、やはり不明であるが、直後の院崩御という結果と、それを描こうとする二条の詞書の存在は容易に推測できる。

さて、この夢で二条の過去が幕を閉じる。院の四十九日も終え、父の三十三回忌を営む時、作者はそれまで秘めてきた別の関心事を夢に託す。それは、父の墓参の折、勅撰集に漏れたことを歎いた結果生じた夢で、二条に作歌を奨励する内容であった。

⑭いづかたにつけても、捨てらるべき身ならず。具平親王よりこのかた、家久しくなるといへども、和歌の浦波絶えせず（巻五・三一四頁）

という、父の言葉が「夢の枕」（三一五頁）に止まり、和歌の道をこれまで以上に意識し始めた二条は、ここでも夢が夢を生むと

いう展開のもとで、悲願である歌道の家再興という現在の目標を明らかにしようとしている。

⑮この時、一人の老翁夢に示し給事ありき。この面影を写しとどめ、この言の葉を記し置く。人丸講の式と名づく。先師の心に叶ふ所あらば、この宿願成就せん。宿願成就せば、この式と用ゐて、かの写しとどむる御影の前にして行ふべしと思ひて、箱の底に入れて空しく過ぐし侍るに、又の年の三月八日、この御影を供養して、御影供といふ事をとり行ふ。（巻五・三一四頁）

⑭の夢の後、歌道への精進を誓い、人丸の墓参と参籠を行った七日目の夜、一人の翁が示現を垂れる。作者としてはその翁の面影と言葉を写したという事実だけを記し、その内容については一切触れていない。歌道の家再興の可能性を、柿本人麻呂が暗示しているこの夢に対し、宿願成就の暁には、自分の描いた「御影」の前で供養を行うことを誓う。そして、御影を「箱の底に入れて空しく過ぐし侍」るだけの生活の末、翌年その人丸影供を執り行っている。[九] この記事は、当然和歌の家の誇りを示すと同時に、今後を形成する指針を明確にしておく必要から生まれたであろう。宿願成就は先送りの形で、この後歌道に関する記事は途絶えている。しかし、宿願を夢に託し、更にこの直後写経を契機に父の形見を売りに出すという展開からも、以後の「心の中の祈誓」（三一六頁）の内容が、跋文にみる「宿願」（三三〇頁）の二面性を仄めかしていることが理解されるであろう。五部大乗経書写と歌道の家再興という二つの願いは、語り終える直前に記して置かなければならないものであったといえる。

そして、最後に記す夢の中では、二条と関わりの深い人々が各々役割を担って登場しているが、ここでは繁雑を極めるので要旨のみを検討していく。

⑯父、後深草院、遊義門院と登場する。後深草院の「御片輪」の疑問に父が、御自身によるのではなく我々衆生の為であると答える。後深草院は梛の葉の付いた白い枝を二本、遊義門院は両親の形見を手放してまで五部の大乗経書写を行うことに対し二つの白衣をそれぞれ二条に与える。懺法が始まる折目覚めた二条の手元には白い檜木の扇の骨があり、夢解きにより千手観音の利生を予言される。（巻五・三一九頁）

最初に登場する父は、往生伝に見る第三者的語りの役割を果たしているといえる。[一〇] そこで語られる後深草院の身体の様子は、明らかに『増鏡』「内野の雪」[十一]に、

帝御かうぶりし給ふ。御年十一。御いみな久仁と申す。いとあてにおはしませど、あまりさゝやかにて、又御腰などのあやしく渡らせ給ふぞ、口をしかりける。いわけなかりし御ほどは、なほいとあさましうおはしましけるを、閑院の内裏焼けけるまぎれより、うるはしくたゝせ給ひたりければ、内の焼けたるあさましさは何ならず、この御腰のなほりたるよろこびぞのみぞ、上下おぼしける。

に見るように、院の幼少時の腰の病が夢の心理に潜在していた。

しかし、『増鏡』の書承背景を考えると、院の身体は完治していなかったのではないかという疑問さえ残る。或いは完治していたとしても院の往生を願うあまりに、実際には二条の知るはずもない院の過去の逸話から、独自の創作が生じたとも考えられる。

まず、表現から見ても、父の説明は『維摩詰所説経』巻中「文殊師利問疾品第五」に表現される菩薩の代受苦を支えとしている。[十二] 又、『長寛勧文』「熊野権現御垂跡縁起」[十三]に説かれた証誠殿の阿弥陀如来、西宮が観世音菩薩を本地仏とすることからも、二人を菩薩とする解釈は成立する。二人への配慮と、後の遊義門院の利生を描く為の、物語効果を踏まえた霊験夢である。そして、梛の葉と扇についても、幾多の説話等のモチーフの類似が確認できる。[十四] ここでいう観音の現世利益も、当然遊義門院との邂逅を示すと考えられる。しかし、それは一方で、二条の行き場のない後深草院思慕の表現が、遊義門院を媒介とする方法へと擦り替えられていくことをも意味している。石清水八幡宮での遊義門院との邂逅では、「見し夢も思ひ合せられ」（三二四頁）て、証果としての夢想に喜び、「かかる御幸に参りあふも大菩薩の御心ざしなり」（三二五頁）とし、⑯においては扇を遊義門院へ献上している。二条の行動は、同じ石清水八幡宮での過去の後深草院との邂逅と併せて、那智の夢想に対する感謝によるものであった。又実際の遊義門院が執筆時、既に崩御していることを考慮すると、年齢的に同時に登場するはずのない三人を同じ夢に描くことで、近親者の往生をここで完全なものにしようと試みたと考える。

抑、東二条院、後深草院の崩御に加え、亀山院の病悩を憂う記事の後、この地における大乗経書写という永年の目的を思い出したことから、「いたく水凍らぬさき」（三一八頁）に参詣は果たされる。長い熊野路の末に音無川を歩む「ぬれわらじの入堂」を配慮してのことであろう。しかし、当時の熊野参詣に関する資料、『いほぬし』[十五]『後鳥羽院熊野御幸記』[十六]『修明門院熊野御幸記』[十七]等に窺われる困難な道程とは対称的に、旅程らしき記事はない。只、「例の宵暁の垢離の水を、前方便になずらへ」（三一九頁）て行う禊程度に終わっている。本来、本宮で夢告を得た後も、宿に入り十二所権現を参詣し、改めて法要が行われる。又、新宮においても同様で、奉弊終了後那智へ向かう。那智では、牛王宝院及びモチーフに準じられるように梛の葉を受け、先達が扇を賜る記事等も御幸記には残されている。儀礼の先例を確認する中、『修明門院御幸記』の承元四年（一二〇一）四月十七日条では、「始有熊野御幸、仍入御御精進屋之日也」とし、禊を終えた後、二十一日「依可有御参石清水也」の後、熊野に向けて乗船している。そして、参詣を終え五月十二日には、「権弁先陣参稲荷、御奉弊事為沙汰具」と、道中の護法を返す為に伏見稲荷を参詣する例も見る。このような通例化した一切の儀礼を、敢えて二条の記録の裏に見るとするならば、石清水八幡宮における院との邂逅が禊であり、遊義門院と再会後の伏見滞在、更には扇の献上という証果を伴う展開が、この熊野参詣の全体像といえよう。即ち、儀礼を伴う旅程が不明という事実とは別に、禊から参詣、そして御礼参り

という順路こそ、明らかに遍歴の道程を辿るものといえる。二条にとって熊野は、石清水八幡宮及び伏見と共に描いて置かなければならない地であった。即ち、自らの語りの終焉を飾る地として、「女人高野」と称された熊野は予め用意されていたのである。

しかし、写経と夢に見る参詣の目的は、自己の問題に止まるものとしては描かなかった。むしろ、この記事は後深草院の御幸の中で自身を描くことを第一としたのではなかったか。歴代の帝王を始めとし、父の御嵯峨院、弟の亀山院については、古記録より数度の熊野御幸を確認することが出来る。(十八) しかし、後深草院については一度としてその記事が見当たらない。文永よりの国難と他の御幸記事を考慮すると、当然後深草院の御幸も果たされてよい。即ち、この地は写経の地として選ばれただけではなく、夢による院御幸の実現も含めて「年ごろ熊野にてと思」（三一八頁）っていたのである。儀礼に準える旅に身を投じる中で、熊野信仰は院と我が身への果報を導く形として、確実に描かれる必要があった。その後、「深草の帝は御かくれの後、かこつべき御事どもも跡絶え果てたる心地」（三三〇頁）になり、今後の宿願に思いを馳せる二条であるが、夢から結果としての現実へとつなぐ一連の展開を記さなければ、この巻末の態度は存在しなかったであろう。

結

十六の夢の記事は、それぞれ予兆からその結果に及ぶ展開を見せ、確実に夢の証しである現実を描いている。例えば、二条の出産回数は正確には分かっていないが、④⑦⑧等のように夢に見た懐妊についてはその後の出産が記されている。逆に夢として描かれていない懐妊については、明確な出産記事もなく、建治三年（一二七七）四月などは着帯の記事がありながらも、出産に関しては兆候も含めて一切触れられていない。このことからも、懐妊を予兆した夢の記事については、たとえそれが他人の見た夢、更に密事であったとしても、何らかの結果を描いている。

また、懐妊以外では、③⑤⑥⑬等をもとに現実世界の展開が、逃れることの出来ない神仏の示現として語られている。同じ夢を指しながらも、内容を出家後の回想で明らかにする①⑪からは、巻三までと巻四以降の世界との、読みへの断絶を見るのではなく、敢えて伏せて置きながら、後にすべてを明らかにしていく、夢の配置という構想の跡を見るべきである。現実世界を描くには限界がある。基準を外れたところに描いてはならない世界が存在するが、生じた不安やそれに伴う夢は、記事の省略という案にさえ支障を来す程のものであったのかもしれない。

例えば、⑭においては未来を予想させる夢の内容を、父の言葉に擦り替えて表現させながらも、語り終えようとする⑮に至っては、改めて今後の指針を自身の言葉で明かしている。夢の内容を問題にするよりは、むしろ、隠された出来事の大きさと託された夢の意図までをも支配している、夢と現実との連携する表現方法自体にこそ注目するべきであろう。

そして、⑫の不可解な内容も説話を機に回想しており、独立するかに見える内容にも、現実の間に組み込まれた夢の位置により、内容の推測は可能である。同様に、巻末⑯の夢も、後深草院の一周忌と三周忌に挟まれており、院を含める近親者の往生を描く意図は明白といえる。無論、父の登場も、歌道に関する宿願とは別に、往生という側面から看過することは出来ない。

夢と、結果としての現実の記録を促したのは、作者としての自覚であった。そして、作品の地軸に据えられた不安の解決も、一定の基準に基づきながら試みられていった。構想に当たり、夢の中での自己の再生を決意した時点から、本作品の「カタリ」は始まったというべきであろう。

注

（一）永井義憲氏「更級日記と夢ノート」（『国文学踏査』一九五八年）。本作品の執筆時期をある一時期とするか否かにもよるが、夢の記録に限らず和歌や説話など、断片的なノートの存在は容易に推測できる。

（二）中世文学研究部会「『とはずがたり』夢の分類」（『駒沢国文』一九六九年）。報告では夢の分類を、睡眠時に見る夢・超現実或いは非現実的経験・現実事象の比喩という三つに大別し、更に細分し物語や虚構の世界をも共に夢としてとらえられている。本稿は、その超現実的な幻覚や怪奇現象を夢とする点に示唆を受ける。

（三）柳田国男氏の「共同幻覚」（「口承文芸史考」『定本柳田国男集』巻六）、菅原昭英氏の「夢がたり共同体」（「夢を信じた世界　九条兼実とその周囲」『日本学』二―一　一九八四年）で、複数の人間が同じ夢を見る状況を全く否定することはできないと考証されている。一方阿部真弓氏は「往生伝としての『とはずがたり』試論――夢を媒介として――」（『詞林』第七号　一九九〇年）で、その可能性を否定すると共に二条以外の男性の夢を虚構であると説かれた。しかし、ここでは、このような現象はもとより、すべての夢の可能性を追うことよりも、むしろ実へと展開する夢自体の価値に注目していく。

（四）流布本本文全体像を見る上で、十行古活字本を底本とする岩波新日本古典文学大系『住吉物語』の、長谷寺霊験譚参照。

（五）これら、先行する物語や同時代の物語については、松本寧至氏の『中世女流日記文学の研究』（明治書院）の『夜の寝覚め』についての指摘を初めとし、最近では辻本裕成氏「同時代文学の中の『とはずがたり』」（『国語国文』五八巻　一九八九年）、があり、又、阿部氏前掲論文（3）では、擬古物語に関わる三つの夢に関する指摘がある。

（六）本作品の「夢」に関わる言葉は多いが、この「夢に夢みる」という表現については特に頻繁に使用されており、独自の表現法とも考えられる。

（七）土門政和氏「『とはずがたり』における当麻曼陀羅説話の性格」（『滋賀大国文』二五　一九八七年）を含め、説話の位置付けが試みられているが、特にこの説話については大林三千代氏「中世

における草薙剣に関する伝承について――とはずがたりと熱田大明神御記伝百録を通して――」（『国文研究』一九七三年）がある。

（八）次田香澄氏（『とはずがたり』日本古典全書）に、作者の宗教的動機と説話の愛好、又新しい出来事まで説話化して流布する中世的傾向の指摘がある。

（九）山田昭全氏の「柿本人麿供の成立と展開――仏教と文学との接触に視点を置いて――」（『大正大学研究記要』五一　一九六六年）、最近では佐々木孝浩氏「『とはずがたり』の人麿影供――二条の血統意識と六条有房の通光影供をめぐって――」（『国語と国文学』七〇巻第七号　一九九三年）がある。

（一〇）父は往生を確認する近親者であると同時に、ここでは巫者的印象が強く、⑮の翁に類似する役割を担っており、折口信夫氏の説く神仏との仲介的役割を果たす翁の存在が考えられる。

（十一）『新訂増補国史大系』二一下所収。猶、本作品と『増鏡』の書承背景に関しては、前掲の松本氏の説を初めとし、宮内三二郎氏『とはずがたり・徒然草・増鏡新見』（明治書院）、最近では竹本源吾氏「『増鏡』の作者についての考証――『とはずがたり』――後深草院二条とのかかわり」（『ぐんしょ』二十二号　一九九三年）等に詳しい。

（十二）杉岡津岐子氏「中世の女流日記文学における夢――『とはずがたり』を中心に――」（『イマーゴ』一九九一年十一月臨時創刊号）及び、日本文学古典大系『とはずがたり　たまきはる』（一九九四年）

（十三）『群書類従』神祇部所収。熊野神道ともいうべき雑多な祭神の縁起を説く。

（十四）『保元物語』上「法皇熊野御参詣并御たくせんの事」、『古今著文集』十一「侍従大納言成通の鞠は凡夫の業に非ざる事」の例。また阿部氏の前掲論文に『三国伝記』「高光少将遁世往生事」の指摘もある。

（十五）『群書類従』紀行部所収

（十六）『神道大系』「熊野三山」所収

（十七）右同

（十八）『百錬抄』『五代帝王物語』『一代要記』『編年記』等に見る、後嵯峨院三度、亀山院一度に至るまで皇室の御幸は、数百度に及ぶ。猶、亀山院の弘安四年を以て、御幸は最後となる。

（ふじい・さみ　尾道短期大学非常勤講師）

芥川龍之介「羅生門」論

――老婆の勝利で終わる物語――

許　南　薫

はじめに

芥川龍之介の「羅生門」は大正四年十一月『帝国文学』に発表されて以来現在に至るまで幅広い読者層をもつ日本の国民文学的な存在になっており、その分作品研究も盛んになされ、現在まで書かれた「羅生門」に関する研究論文は三百編近くにもなっている。「羅生門」を研究しようとする際、最も重要で至難な作業はこのような膨大な数の先行研究を整理し、自分なりに理解することであろう。

「羅生門」は原稿用紙に換算すると十五・六枚程度の短い短篇であり、実際書かれている作品内の経過時間も一時間にもならない短時間であり、登場人物も主人公の下人と老婆の二人しかいないという極めて簡単な構造の作品である。この簡単な構造の中での唯一の事件、つまり羅生門の楼の上で下人と老婆の間に起きた出来事を中心に現在まで数多くの「羅生門」論が書かれてきた。その論の殆どは、主人公の下人の心理の変化や変貌していく下人の様子に焦点を合わせて作品を読んでいるのが実状である。テキストの言説の多くの部分が下人の心理の説明に割り当てられ、語り手の視点も殆ど下人の側を離れないという事実からみると、それは当然のことであるともいえる。

しかしそのため、この作品の下人以外の唯一の登場人物である老婆の存在は無視されていいのかという疑問が生じる。もちろん殆どすべての論が、老婆の弁解の部分も重点的に分析し、そこから下人が何を読み取ったかということに関して言及している。しかしそれはあくまでも下人側から考えた老婆の弁解の論理であって、老婆の人格や老婆の身の上の変化などに注目している論は、さほど見あたらない。このような状況をふまえて、羅生門の楼の上での出来事を、老婆を中心に老婆側に寄り添った視点をもって読んでみることによって、「羅生門」の読みに若干の疑問を提示してみようとするのが本稿の目的である。